



図 6.8-4 平成20年度～令和4年度における月別衝突回数

### 3. 両生類・爬虫類

調査結果は表 6.8-16 に示すとおりであり、両生類 2 種、爬虫類 8 種、合計で 2 目 7 科 10 種の両生類・爬虫類が確認された。このうち、飛行場及びその周辺では両生類 1 種、爬虫類 6 種の合計 7 種、土砂採取区域及びその周辺では、両生類 2 種、爬虫類 8 種、合計 10 種が確認された。

飛行場及びその周辺の樹林ではヤクヤモリ、オキナワキノボリトカゲといった樹上性の種が確認された。ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、シマヘビ、ヤマカガシといった地上性の爬虫類は、草地を中心にして確認された。住宅地周辺では、オキナワキノボリトカゲ、ニホントカゲが確認された。飛行場周辺には、水たまり等の小水域が点在しており、ニホンアマガエルの幼生が確認された。

土砂採取区域及びその周辺ではニホントカゲ、ニホンカナヘビ、アオダイショウ、シマヘビといった地上性の爬虫類が、道路上や隣接する草地で確認された。ヤクヤモリは壁面で、ニホンヒキガエルは夜間に牧場敷地の道路上で確認された。

表 6.8-16 両生類・爬虫類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認位置			
				飛行場及びその周辺		土砂採取区域及びその周辺	
				春季	夏季	春季	夏季
1	カエル	ヒキガエル	ニホンヒキガエル				●
2		アマガエル	ニホンアマガエル	●	●	●	
3	トカゲ	ヤモリ	ヤクヤモリ	●	●	●	●
4		アガマ	オキナワキノボリトカゲ	●	●		●
5		トカゲ	ニホントカゲ	●	●	●	●
6		カナヘビ	ニホンカナヘビ	●		●	●
7		ナミヘビ	シロマダラ			●	
8			アオダイショウ				●
9			シマヘビ	●			●
10		ヤマカガシ	●		●		
合計	2目	7科	10種	7種	4種	6種	7種

注) 1. 種名及び配列は原則として「日本産爬虫両生類標準和名リスト」(令和 3 年、日本爬虫両棲学会)に準拠した。

注) 2. 「●」は調査で確認された種を示す。

### 4. 昆虫類

調査によって確認された昆虫類は表 6.8-17 に示す 18 目 190 科 928 種であった。このうち、飛行場及びその周辺では 152 科 590 種、土砂採取区域及びその周辺では 151 科 547 種の昆虫類が確認された。確認種一覧は資料編(資料 5-6~16)に記載する。

飛行場北側、海沿いの広場や管理道路沿いの草地には、トノサマバッタやツチイナゴ等のバッタ類や開けた草地を好むタテハモドキやアオタテハモドキ、アカタテハ等が比較的多く見られた。飛行場南側には、ヒメマルゴキブリやコブナナフシ等の樹林性で、朽下や倒木の樹皮等で見られる種が確認された。また、ゴミムシダマシ科のヒゲブトゴミムシダマシ、カミキリムシ科のオビレカミキリやドイカミキリ、アリ科のハヤシクロヤマアリやケブカアメイロアリ等の樹林を好む種も確認された。

土砂採取区域及びその周辺で確認されたバッタ目、コウチュウ目、カメムシ目、ハチ目、ハエ目等は草地や林縁でよく見られる種で構成されていた。多くは南九州に広く分布する種であり、屋久島固有種は確認されなかった。

表 6.8-17 昆虫類確認種概要

No.	目名	確認位置			
		飛行場 及びその周辺		土砂採取区域 及びその周辺	
		科数	種数	科数	種数
1	カゲロウ	-	-	2	4
2	トンボ	3	4	4	7
3	ゴキブリ	4	9	3	6
4	カマキリ	1	1	1	3
5	ハサミムシ	2	2	1	1
6	カワゲラ	1	1	1	2
7	バッタ	14	34	15	34
8	ナナフシ	2	3	1	2
9	カメムシ	32	95	25	76
10	ヘビトンボ	1	1	-	-
11	アミメカゲロウ	2	2	1	1
12	トビケラ	4	5	3	3
13	チョウ	20	168	24	176
14	ハエ	22	43	24	44
15	コウチュウ	28	164	31	134
16	ハチ	14	55	14	53
17	シロアリ	1	2	1	1
18	イシノミ	1	1	-	-
合計		152科	590種	151科	547種
		18目190科928種			

注) 配列は原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(令和2年、国土交通省)に準拠し、上記リストに分類群は「日本昆虫目録」(日本昆虫目録編集委員会)又は「日本産蛾類標準図鑑」(平成23年、学研)、「日本産直翅類標準図鑑」(平成23年、学研)を参考とした。

## 5. 陸産貝類

調査によって確認された陸産貝類は飛行場北側は樹林幅が狭く林床は乾燥気味であり、陸産貝類の生息にはやや厳しい環境であり、比較的乾燥に強い中型種が多く生息していた。また、随所に小河川や湧水が見られ、このような場所では樹幹や葉上で、比較的湿度の保たれた森林に生息する種が確認された。飛行場南側の樹林は、林床に落ち葉が多く、適度な湿気がある環境であり、ゴマガイ類等の微小貝、その他多種の陸産貝類が確認された。

土砂採取区域及びその周辺の樹林では、多くの陸産貝類が確認されており、特に喜三次川沿いの照葉樹林では、ゴマガイ類等の微小貝、その他多種の陸産貝類が確認された。

表 6.8-18 に示す 15 科 40 種であった。このうち、飛行場及びその周辺では 35 種、土砂採取区域及びその周辺では 31 種の陸産貝類が確認された。

飛行場北側は樹林幅が狭く林床は乾燥気味であり、陸産貝類の生息にはやや厳しい環境であり、比較的乾燥に強い中型種が多く生息していた。また、随所に小河川や湧水が見られ、このような場所では樹幹や葉上で、比較的湿度の保たれた森林に生息する種が確認された。飛行場南側の樹林は、林床に落ち葉が多く、適度な湿気がある環境であり、ゴマガイ類等の微小貝、その他多種の陸産貝類が確認された。

土砂採取区域及びその周辺の樹林では、多くの陸産貝類が確認されており、特に喜三次川沿いの照葉樹林では、ゴマガイ類等の微小貝、その他多種の陸産貝類が確認された。

表 6.8-18 陸産貝類確認種一覧

No.	科名	種名	確認位置	
			飛行場及びその周辺	土砂採取区域及びその周辺
1	ヤマタニシ	ヤマタニシ	●	
2		ミジンヤマタニシ	●	●
3	ヤマクルマガイ	ヒメヤマクルマガイ	●	●
4	ムシオイガイ	サツمامシオイ	●	
5		タネガシمامシオイ		●
6	アズキガイ	アズキガイ	●	●
7		フナトウアズキガイ	●	●
8	ゴマガイ	タネガシマゴマガイ	●	●
9		ヤクシマゴマガイ	●	●
10	キセルガイモドキ	チャイロキセルガイモドキ	●	●
11	キセルガイ	ビントノミギセル	●	●
12		ハラプトノミギセル	●	●
13		タネガシマギセル		●
14		ハラプトギセル	●	●
15		ヤコビギセル		●
16		トカラコギセル	●	
17	オカクチキレガイ	ホソオカチョウジガイ	●	
18		オカチョウジガイ	●	●
19		<i>Allopeas</i> sp.	●	●
20	タワラガイ	ヤクシマタワラガイ	●	
21	ナタネガイ	ミジンナタネガイ	●	
22	ナメクジ	ヤマナメクジ	●	●
23	シタラ	カサキビ		●
24		ヒメカサキビ	●	●
25		ヒメベッコウ	●	●
26		ヤクシマヒメベッコウ	●	●
27		コシタカシタラガイ	●	●
28		ウメムラシタラガイ	●	
29		オオクラヒメベッコウ	●	●
30		タネガシマヒメベッコウ	●	●
31		コシダカヒメベッコウ		●
32		ヤクシマシタラガイ	●	●
33	ベッコウマイマイ	ソコシカサキビ	●	
34		ヤクシマベッコウ	●	●
35	カサマイマイ	タカカサマイマイ	●	●
36	ナンバンマイマイ	クチジロビロウドマイマイ	●	●
37		ヘソカドケマイマイ	●	
38		ツバキカドマイマイ	●	●
39		ヤクシママイマイ	●	●
40		チャイロマイマイ	●	●
合計	15科	40種	35種	31種

注) 1. 種名及び配列は原則として「日本陸産貝類総目録」(昭和63年、日本陸産貝類総目録刊行会)に準拠した。

注) 2. 「●」は調査で確認された種を示す。

## 6. オカヤドカリ類

調査によって、飛行場北～北東側にかけての海岸沿で、延べ21個体のオカヤドカリ類が確認された。確認位置は、マルバニッケイ林などの海岸林が連続する区間であった。

飛行場南側の海岸では、オカヤドカリ類は確認されなかった。

表 6.8-19 オカヤドカリ類確認概要

No.	目名	科名	種名	確認箇所数・個体数	
				令和元年7月8～10日	令和3年8月16日
1	エビ	オカヤドカリ	オカヤドカリ類 <sup>注</sup>	2箇所・10個体	4箇所・11個体

注) 文化財保護法では、屋久島に分布する種でムラサキオカヤドカリ、ナキオカヤドカリ、オカヤドカリが天然記念物の指定を受けている。現地調査で確認された個体は形態などからこれらの中の1種であると考えられる。

## 7. 魚類

調査によって確認された魚類は表 6.8-20 に示す 3 目 7 科 17 種であった。

Q1 及び Q2 が設定された女川は、調査対象河川の中では最も規模が大きく、ゴマフエダイやボラ等の汽水域に生息する魚類が確認された。

Q3 は溪流でありコイ等の淡水魚やボウズハゼ等の回遊魚が確認された。

Q4 は閉鎖的な湿地に設定された地点であり、魚類の確認はなかった。

Q5 は喜三次川、Q6 は加治屋川の滑走路下流側に設定された地点であり、河川と海域の間に止水や緩流域が分布しておらず、また水が枯れる時期もあり回遊種が遡上しやすい環境ではなかった。このような環境を反映して、ボウズハゼやクロヨシノボリ等の底生魚が多く確認された。

Q7 は加治屋川、Q8 は大川の滑走路上流側に設定された地点である。河口が回遊種の遡上に適した環境ではないこともあり確認種数は少なく、ボウズハゼとクロヨシノボリが確認されたのみであった。

Q9 は土砂採取区域内を流下する喜三次川に設定された地点であり、溪流の様相を呈した環境でクロヨシノボリが確認された。

表 6.8-20 魚類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認地点									
				Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	
1	ウナギ	ウナギ	ニホンウナギ	環境保全上の観点から非公表とする									
2			オオウナギ										
3	コイ	コイ	コイ			●							
4	スズキ	ユゴイ	オオクチユゴイ	●									
5			ユゴイ	●	●	●		●					
6		フエダイ	ゴマフエダイ	●									
7			ボラ		●								
8		カワアナゴ	テンジクカワアナゴ						●				
9		ハゼ	アカボウズハゼ	環境保全上の観点から非公表とする									
10			ボウズハゼ	●	●	●		●	●			●	
11			ルリボウズハゼ	環境保全上の観点から非公表とする									
12			ナンヨウボウズハゼ			●		●					
13			ヒナハゼ	●	●								
14	ゴクラクハゼ		●	●									
15	クロヨシノボリ		●	●	●		●	●	●	●	●	●	
16	シマヨシノボリ		●	●									
17	ナガノゴリ	●	●										
合計	3目	7科	17種	環境保全上の観点から非公表とする									

注) 1. 種名及び配列は原則として「日本産魚類検索 全種の同定 第3版」(平成 25 年、東海大学出版会)に準拠した。

注) 2. 「●」は調査によって確認された種を示す。

8. 甲殻類

調査によって確認された甲殻類は表 6.8-21 に示す7目10科26種であった。

Q1～Q6 は、海との距離が近くタイワンヒライソモドキやオオヒライソガニ等の汽水性のカニ類が確認された他、コンジテナガエビ、スジエビ、トゲナシヌマエビ等のエビ類も多く確認された。

Q7 及び Q8 は滑走路下を流下する暗渠の上流側に位置しており、河口が回遊種の遡上に適した環境ではないこともあり、サワガニ、トゲナシヌマエビ等のエビ類が確認されたものの確認種数は少なかった。

Q9 は溪流的な様相を呈した地点でありサワガニ等が確認された。

表 6.8-21 甲殻類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認地点								
				Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
1	ウズムシ	サンカクアタマウズムシ	ナミウズムシ属 s.p.				●	●	●	●		
2	イトミミズ	イトミミズ	イトミミズ科 s.p.				●			●		
3	イシビル	イシビル	イシビル科 s.p.						●			
4	ウオビル	グロシフォニ	ヌマビル								●	
5	ワラジムシ	ミズムシ	ミズムシ				●	●	●			
6	ヨコエビ	不明	ヨコエビ目 s.p.	●	●	●						
7	エビ	サワガニ	サワガニ		●	●	●	●	●	●	●	●
8		イワガニ	モクズガニ	環境保全上の観点から非公表とする								
9			ケフサヒライソモドキ									
10			タイワンヒライソモドキ									
11			ベンケイガニ									
12		オオヒライソガニ		●	●		●					
13		テナガエビ	コツノテナガエビ	環境保全上の観点から非公表とする								
14			ザラテナガエビ									
15			ミナミテナガエビ	環境保全上の観点から非公表とする								
16			ツブテナガエビ									
17			オオテナガエビ									
18	ヒラテナガエビ			●	●		●			●	●	
19	コンジテナガエビ				●		●	●	●	●	●	
20	スジエビ		●	●		●	●	●	●	●		
21		テナガエビ科 s.p.	●									
22	ヌマエビ	ミゾレヌマエビ		●								
23		ヤマトヌマエビ	環境保全上の観点から非公表とする									
24		サキシヌマエビ										
25		トゲナシヌマエビ										
26		ヒメヌマエビ	●	●			●	●	●	●	●	
合計	7目	10科	26種	環境保全上の観点から非公表とする								

- 注) 1. 種名及び配列は原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(令和2年、国土交通省)に準拠した。
- 注) 2. 「●」は調査によって確認された種を示す。
- 注) 3. No. 列の「-」は種・亜種まで同定されていない種について、同一分類に属する種がリストアップされているものを示す。この場合、種数の合計に1種として計上していない。
- 注) 4. No. 1～No.4 は、甲殻類ではないが、甲殻類調査で確認されたため併記している。

9. 貝類

調査によって確認された貝類は表 6.8-22 に示す2目2科3種であった。

確認種は巻貝類のみであり、イシマキガイ、フネアマガイ、カワニナが確認された。

表 6.8-22 貝類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認地点								
				Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
1	アマオブネガイ	アマオブネガイ	イシマキガイ	環境保全上の観点から非公表とする								
2			フネアマガイ									
3	ニナ	カワニナ	カワニナ		●	●	●	●	●	●	●	
合計	2目	2科	3種	環境保全上の観点から非公表とする								

- 注) 1. 種名及び配列は原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(令和2年、国土交通省)に準拠した。
- 注) 2. 「●」は調査によって確認された種を示す。

## 10. 水生昆虫類

調査によって確認された水生昆虫は表 6.8-23 に示す 8 目 39 科 90 種であった。確認種一覧は資料編（資料 5-17～18）に記載する。トビケラ目及びハエ目の昆虫が 20 種以上と比較的によく確認されているが、トンボ目やカゲロウ目、カワゲラ目などは 10 種以下と少なかった。

代表的な水生昆虫類であるカゲロウ目やトビケラ目は、全調査地点から確認されており、その中でムナグロナガレトビケラやシロタニガワカゲロウ等は確認地点数も多く、この地域での普通な種と考えられる。

トンボ目は止水域を好むとされる種の確認が多く、流水性種の確認は限られている。

ハエ目は全調査地点から 34 種確認され、その多くがユスリカ類であった。

表 6.8-23 水生昆虫類確認概要

No.	目名	確認地点																			
		Q1		Q2		Q3		Q4		Q5		Q6		Q7		Q8		Q9		合計	
		科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数
1	カゲロウ	2	3	2	3	2	2	2	3	4	6	4	6	2	3	4	6	3	3	4	9
2	トンボ	-	-	1	1	-	-	4	5	1	1	1	1	2	2	2	2	3	3	6	10
3	カワゲラ	-	-	-	-	2	2	2	4	1	2	2	2	1	1	2	2	2	4	2	5
4	カメムシ	-	-	1	2	-	-	2	4	-	-	1	2	1	1	1	1	1	2	2	5
5	ヘビトンボ	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6	トビケラ	2	2	4	4	5	7	5	7	5	7	9	11	8	9	11	14	7	8	13	21
7	ハエ	1	4	1	4	2	7	4	12	5	12	3	15	3	11	3	14	6	12	8	34
8	コウチュウ	-	-	-	-	1	1	1	1	1	1	1	1	-	-	2	2	3	3	3	5
合計	8目	5	9	9	14	12	19	20	36	18	30	22	39	18	28	26	42	26	6	39	90
		39科90種																			

注) 配列は原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（令和 2 年、国土交通省）に準拠し、上記リストに分類群は「日本産水生昆虫 科・属・種への検索」（平成 17 年、東海大学出版）、「ユスリカ科の幼虫の分類（4）、淡水生物第 87 号」（平成 17 年、淡水生物研究所）等を参考とした

## 11. その他の底生動物

調査によって確認されたその他の底生動物は表 6.8-24 に示す 4 目 4 科 4 種であった。

ナミウズムシ属は Q4～7 で確認されており、イトミミズ科は Q4、イシビル科は Q6、ヌマビルは Q8 のみでの確認であった。

表 6.8-24 その他の底生動物確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認地点								
				Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
1	ウズムシ	サンカクアタマウズムシ	ナミウズムシ属 s p.				●	●	●	●		
2	イトミミズ	イトミミズ	イトミミズ科 s p.				●			●		
3	イシビル	イシビル	イシビル科 s p.						●			
4	ウオビル	グロシフォニ	ヌマビル									●
合計	4目	4科	4種	0種	0種	0種	2種	1種	2種	2種	1種	0種

注) 1. 種名及び配列は原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（令和 2 年、国土交通省）に準拠した。

注) 2. 「●」は調査によって確認された種を示す。

b. 陸域動物の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況

保護上重要な種の選定基準は表 6.8-25 に示すとおりとした。

確認された陸域動物のうち、保護上重要な種に該当する動物種は表 6.8-26 に示す 66 種であった。保護上重要な種ごとの分布、生息の状況及び生息環境の状況を P.6-8-27～P.6-8-37 に、確認位置を P.6-8-38 (図 6.8-5 参照)～P.6-8-82 (図 6.8-49 参照) に示す。

なお、表 6.8-25 に示す選定基準に該当するものの、調査地域(屋久島)において、外来種※に該当する種については、保護上重要な種として扱っていない。

※以下の法令等で指定されている種

- ・「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」(平成 16 年法律第 78 号)
- ・「指定外来動植物による鹿児島島の生態系に係る被害の防止に関する条例」(平成 31 年鹿児島県条例第 11 号)

表 6.8-25 保護上重要な種の選定基準

略号	選定基準 名称等	カテゴリー	
		記号	区分
文化財保護法等	「文化財保護法」(昭和 25 年法律第 214 号)に基づき国が天然記念物若しくは特別天然記念物に指定している動植物及び県・町が「文化財保護条例」に基づき天然記念物に指定している動植物	特	特別天然記念物指定種
		天(国)	天然記念物指定種(国)
		天(県)	天然記念物指定種(県)
		天(町)	天然記念物指定種(町)
種の保存法	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成 4 年法律第 75 号)において指定されている動植物種	国内	国内希少野生動植物種
		国際	国際希少野生動植物種
		緊急	緊急指定種
県保護条例	「鹿児島県希少野生動植物の保護に関する条例」(平成 15 年鹿児島県条例第 11 号)で鹿児島県指定希少野生動植物種に指定されている動植物	指定	鹿児島県指定希少野生動植物
環境省 RL	「環境省レッドリスト 2020 の公表について」(令和 2 年、環境省ホームページ)において絶滅危惧 I 類・IA 類・IB 類・II 類、準絶滅危惧、情報不足に判定されている動植物	絶滅	絶滅
		野絶	野生絶滅
		IA 類	絶滅危惧 IA 類
		IB 類	絶滅危惧 IB 類
		II 類	絶滅危惧 II 類
		準絶	準絶滅危惧
海洋生物 RL	「環境省版海洋生物レッドリストの公表について」(平成 29 年、環境省ホームページ)において絶滅危惧 I 類・IA 類・IB 類・II 類、準絶滅危惧、情報不足に判定されている動物	絶滅	絶滅
		野絶	野生絶滅
		IA 類	絶滅危惧 IA 類
		IB 類	絶滅危惧 IB 類
		II 類	絶滅危惧 II 類
		準絶	準絶滅危惧
県 RDB	「改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物-鹿児島県レッドデータブック 2016-」(平成 28 年、鹿児島県)において絶滅危惧 I 類・II 類、準絶滅危惧、情報不足に判定されている動植物及び消滅危惧 I 類・II 類、準消滅危惧、情報不足に判定されている地域個体群	絶滅	絶滅
		野絶	野生絶滅
		I 類	絶滅危惧 I 類
		II 類	絶滅危惧 II 類
		準絶	準絶滅危惧
		情不	情報不足
		消滅	消滅(地域個体群)
		野消	野生消滅(地域個体群)
		消 I 類	消滅危惧 I 類(地域個体群)
		消 II 類	消滅危惧 II 類(地域個体群)
		準消	準消滅危惧(地域個体群)
		情不(地)	情報不足(地域個体群)
水産庁 DB	「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック(水産庁編)」(平成 10 年、日本水産資源保護協会)において絶滅危惧種、危急種、希少種、減少種、減少傾向に判定されている動植物	絶危	絶滅危惧種
		危急	危急種
		希少	希少種
		減少	減少種
		減傾	減少傾向

注) 県 RDB のカテゴリー区分では、分布特性上重要を「現在のところ県内ではごく普通に見られ、絶滅もしくは消滅の危険は低いと考えられるが、その分布の特性から考えて、今後の動向に注意を払っていくべきであると判断される種」と定義している。現状で明らかに減少傾向を示すような動向は確認されていないため、今回の調査では分布特性上重要に区分されている種は保護上重要な種として扱っていない。



表 6.8-26 確認された保護上重要な種一覧

No.	分類群	科名	種名	保護上重要な種の選定基準						
				文化財 保護法等	種の 保存法	県保護 条例	環境省 RL	海洋生物 RL	県 RDB	水産庁 DB
1	哺乳類	トガリネズミ	ニホンジネズミ							情不
2		ヒナコウモリ	コテングコウモリ							II類
3	鳥類	ハト	カラスバト	天(国)				準絶		準絶
4		ミサゴ	ミサゴ					準絶		準絶
5		タカ	ハイタカ					準絶		準絶
6			サシバ					II類		II類
7		キツツキ	タネアオゲラ							準絶
8		ハヤブサ	ハヤブサ		国内			II類		II類
9	爬虫類	ヤモリ	ヤクヤモリ					II類		II類
10	昆虫類	マルゴキブリ	ヒメマルゴキブリ							情不
11		コノハムシ	コブナナフシ							準絶
12		ゲンゴロウ	コガタノゲンゴロウ					II類		
13		スズメバチ	ヤマトアシナガバチ					情不		
14	陸産貝類	ヤマタニシ	ヤマタニシ							消II類
15			ミジンヤマタニシ							準危
16		ヤマクルマガイ	ヒメヤマクルマガイ							準絶
17		ムシオイガイ	サツمامシオイ					準絶		準絶
18			タネガシマムシオイ					準絶		準絶
19		アズキガイ	アズキガイ							準危
20			フナトウアズキガイ							準絶
21		ゴマガイ	タネガシマゴマガイ							準絶
22			ヤクシマゴマガイ					準絶		準絶
23		キセルガイモドキ	チャイロキセルガイモドキ					II類		II類
24		キセルガイ	ピントノミギセル							準絶
25			ハラプトノミギセル					準絶		準絶
26			タネガシマギセル					準絶		準絶
27			ハラプトギセル							準絶
28			ヤコビギセル							準絶
29			トカラコギセル					I類		準絶
30		タワラガイ	ヤクシマタワラガイ							準絶
31		ナタネガイ	ミジンナタネガイ							準絶
32		シタラ	カサキビ							準絶
33			ヒメカサキビ					準絶		準絶
34			ヒメベッコウ							準絶
35			ヤクシマヒメベッコウ							準絶
36			コシタカシタラガイ							準絶
37			ウメムラシタラガイ					準絶		準絶
38			オオクラヒメベッコウ							準絶
39			タネガシマヒメベッコウ							準絶
40			コシダカヒメベッコウ					準絶		準絶
41			ヤクシマシタラガイ							準絶
42		ベッコウマイマイ	ソコスジカサキビ					情不		準絶
43			ヤクシマベッコウ					情不		準絶
44		カサマイマイ	タカカサマイマイ					準絶		準絶
45		ナンバンマイマイ	クチジロビロウドマイマイ					II類		II類
46			ヘソカドケマイマイ					準絶		準絶
47			ツバキカドマイマイ					II類		準絶
48			ヤクシママイマイ					II類		II類
49			チャイロマイマイ							準絶
50	オカヤドカリ類	オカヤドカリ	オカヤドカリ類	天(国)						
51	魚類	ウナギ	ニホンウナギ					I B類		I類
52			オオウナギ							減少
53		ハゼ	アカボウズハゼ					IA類		準絶
54			ルリボウズハゼ					II類		II類
55	甲殻類	イワガニ	モクズガニ							減傾
56			ケフサヒライソモドキ							準絶
57			タイワンヒライソモドキ					準絶		
58			バンケイガニ					準絶		
59		テナガエビ	コツノテナガエビ							準絶
60			ミナミテナガエビ							減少
61			ツブテナガエビ					準絶		準絶
62		ヌマエビ	ヤマトヌマエビ							準絶
63			サキシマヌマエビ	天(県)		指定		準絶		II類
64	貝類	アマオブネガイ	イシマキガイ							減少
65			フネアマガイ							減傾
66	水生昆虫類	ゲンゴロウ	キボシケシゲンゴロウ					情不		
合計	10分類群	33科	66種	3種	1種	1種	31種	2種	55種	5種

注) 1. 選定基準及びカテゴリは表 6.8-25 参照。

注) 2. オキナワキノボリトカゲ(爬虫類)は保護上重要な種の選定基準に該当するものの、「指定外来動植物による鹿児島県の生態系に係る被害の防止に関する条例」(平成31年鹿児島県条例第11号)において、屋久島の個体群は県内由来外来種とされていることから、保護上重要な種として扱っていない。

注) 3. チャイロキセルガイモドキ (*Luchuena nesiotica*) は、環境省 RL ではチャイロキセルモドキと記載されている。

## 1. ニホンジネズミ

北海道、本州、四国、九州とその周辺離島に分布しており、主に竹林、草地、森林内などに生息する。鹿児島県では県本土やトカラ列島中之島以北の島嶼に分布しているが、島嶼（種子島、屋久島、口永良部島、口之島、中之島）では生息数が少なく、近年の調査報告例がないため、県 RDB において本地域の個体群を情報不足に選定している。

調査では、飛行場の改変区域外で死体が 1 個体確認された。

## 2. コテングコウモリ

北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布しており、主に高木を有する照葉樹林内を生活場として利用する。ねぐらとして、樹洞、廃坑、隧道の天井隙間、樹皮の隙間、枯葉内を利用する。

コウモリ類調査時に、飛行場の改変区域外 1 箇所音声を確認された。

## 3. カラスバト

鹿児島県内では、長島、甕島列島、宇治群島、黒島、種子島、屋久島、口永良部島、トカラ列島、奄美諸島、沖秋目島など、ほとんどの島嶼に留鳥として生息している。生息環境は、おもに島嶼のシイ・タブなどからなる常緑広葉樹林や灌木林である。

調査では、飛行場の改変区域内及び土砂採取区域の改変区域内外の樹林において生息が確認され、土砂採取区域における確認例数が特に多くなっていた。

調査範囲において、巣は確認されていない。

飛行場では地上付近で確認され、土砂採取区域では樹上付近で多く確認された。

## 4. ミサゴ

鹿児島県内では、島嶼を含む全域の海岸や河口周辺に生息している。内陸部でも記録があり、冬季は越冬個体が増える。鹿児島県内の海岸各地、甕島列島、宇治群島、硫黄島、口之島、中之島、平島等で営巣の確認がある。生息環境は、中、小型魚類の多い開けた水域と、営巣するための崖や高木があるような、海岸、河口、湖沼などである。

調査では、冬季に飛行場東側の海岸線上空を飛翔する個体が 1 例確認された。

## 5. ハイタカ

鹿児島県内では、薩摩半島、大隅半島、甕島列島、草垣群島、屋久島、種子島、口之島、中之島、平島、悪石島、小宝島、宝島、与論島で確認されている。鹿児島県内で繁殖は確認されていない。生息環境は、河川及び里山から森林まで広く分布しているが、平地では少ない。

調査では、冬季に飛行場南側の樹林上空を飛翔する個体が 1 例確認された。

## 6. サシバ

鹿児島県内では、県本土全域に夏鳥として渡来し、繁殖する。また、種子島以南で越冬し、南西諸島で多数みかける。生息環境は低山～山地の森林、里山や農耕地で、主に里山で繁殖し、周辺の水田で採餌する。

調査では、秋季のルートセンサス時に飛行場南側の耕作地上空を飛翔する個体が1例確認された。

## 7. タネアオゲラ

アオゲラは日本固有種であり、タネアオゲラは屋久島と種子島にのみ分布する亜種である。本亜種は平地から山地の広葉樹林帯に生息する。太い木のある広葉樹林等に生息し、スギやヒノキの針葉樹林帯には生息しない。

調査では、土砂採取区域の改変区域内外の樹林で複数回確認された。

## 8. ハヤブサ

鹿児島県内全域にほぼ一年中生息するが、冬季に観察例が多い。繁殖期には主に崖のある海岸で見られ、冬季には崖のある海岸や海沿い、内陸の広い農耕地などで見られる。

調査では、秋季に飛行場南側の樹林上空を飛翔する個体が1例確認された。

## 9. ヤクヤモリ

大隅諸島、九州南部及び北西部に分布しており、主に岩場、森林、ミカン畑、ヤシの枯れた葉の隙間、ガジュマルの幹の隙間などに生息する。

調査では、飛行場改変区域内外、土砂採取区域の改変区域外で複数個体が確認された。

## 10. ヒメマルゴキブリ

鹿児島県内では、大隅半島佐多岬、下甕島、中之島、宝島、奄美大島、徳之島、沖永良部に記録があるが、いずれも古い記録で最近の記録はない。成虫、幼虫とも腐木又はそれに生じたキクラゲなどの菌類や樹液に集まる。

調査では、飛行場改変区域内外樹林内で確認された。

## 11. コブナナフシ

鹿児島県内では、佐多岬、屋久島、口永良部島、悪石島、奄美大島、与路島、徳之島で記録がある。林内や林縁の低木、防風林沿いの草むらなど地面の低いところに生息している。

調査では、飛行場改変区域内樹林の枯れ枝において複数個体が確認された。

## 12. コガタノゲンゴロウ

本州ではほぼ絶滅状態のようであるが、九州では比較的個体数が多く、鹿児島県では最も普通に見られる大型のゲンゴロウ類である。平地から低山地の水生植物の生える池沼、放棄水田などに生息する。

調査では、飛行場周辺の樹林において1個体が確認された。

## 13. ヤマトアシナガバチ

本州、四国、九州、琉球に分布する。平地、低山地に生息し、草本の葉裏や樹木の細枝、人家の軒下、壁などに営巣する。

調査では、土砂採取区域及びその周辺いにおいて数個体が確認された。

## 14. ヤマタニシ

本州、四国、九州、済州島、甌島列島、種子島、屋久島、草垣群島、口永良部島、口之島に分布する。本種は照葉樹林の林床の落葉層に生息している。分布は広範囲だが、離島個体群は個体数が少ない。

調査では、飛行場改変区域内外の樹林で多数の個体が確認された。

## 15. ミジンヤマタニシ

北海道、本州、四国、九州、宇治群島向島、大隅諸島、トカラ列島、奄美群島、沖縄本島、久米島に分布する。本種は、照葉樹林の林床の落葉層に生息している。比較的湿った林内を好むため、森林伐採による乾燥化で生息域が減っている。

調査では、飛行場改変区域内外、土砂採取区域改変区域内外の周辺樹林の広域で分布が確認された。

## 16. ヒメヤマクルマガイ

大隅諸島に分布する。本種は照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地には比較的多いが、森林の減少に伴って生息地が減っている。

調査では、飛行場改変区域内外、土砂採取区域改変区域内外樹林の倒木下や落葉中で多数確認された。

## 17. サツمامシオイ

薩摩地方、大隅地方に分布する。本種は照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴い減っている。

調査では、飛行場改変区域内の樹林で4個体が確認された。

#### 18. タネガシマムシオイ

大隅諸島に分布する。本種は照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息しており、生息にはある程度湿度の保たれた森林が必要である。

調査では、土砂採取区域改変区域内外の周辺樹林の、朽木下や落葉中で確認された。

#### 19. アズキガイ

本州、四国、九州、対馬、甕島列島、大隅諸島、トカラ列島に分布する。本種は照葉樹林の林床の落葉層に生息している。落葉層が発達した森林に多いため、森林伐採によって生息地が減っている。

調査では、飛行場改変区域内、土砂採取区域改変区域内外の周辺樹林の倒木下や落葉中で多数確認された。

#### 20. フナトウアズキガイ

大隅諸島に分布する。本種は照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。落葉層が発達した森に多いため、森林伐採によって生息地が減っている。

調査では、飛行場及び土砂採取区域改変区域内外樹林の広い範囲で多数の個体が確認された。

#### 21. タネガシマゴマガイ

大隅諸島に分布する。本種は照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。落葉層が発達した森に多いため、森林伐採によって生息地が減っている。

調査では、飛行場改変区域内、土砂採取区域改変区域内外樹林の朽木下や落葉中で多くの個体が確認された。

#### 22. ヤクシマゴマガイ

屋久島に分布する。本種は照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地には比較的多いが、森林の減少に伴って生息地が減っている。

調査では、飛行場改変区域内、土砂採取区域改変区域内外樹林全域の朽木下や落葉中で多くの個体が確認された。

#### 23. チャイロキセルガイモドキ

佐多岬、大隅諸島に分布する。本種は樹上性で、照葉樹林の樹幹に付着している。生息にはある程度湿度の保たれた森林が必要である。近年、人為的な採集によって減少しており個体数は少ない。

調査では、飛行場改変区域内及び土砂採取区域改変区域外樹林の樹上で主に確認された。

#### 24. ピントノミギセル

徳島県、大分県、大隅諸島、トカラ列島に分布する。本種は朽木を好み、照葉樹林などの林内の倒木下や内部に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴って減っている。調査では、飛行場改変区域内外及び土砂採取区域改変区域内の落葉中で確認された。

#### 25. ハラブトノミギセル

大隅諸島に分布する。本種は照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴って減っている。

調査では、飛行場及び土砂採取区域改変区域内外樹林広い範囲の朽木下や落葉中で多数の個体が確認された。

#### 26. タネガシマギセル

大隅諸島に分布する。本種は殻高 17.5mm、殻径 4.0mm 程度の小型の貝で、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息しており、生息にはある程度湿度の保たれた森林が必要である。

調査では、土砂採取区域改変区域内外の樹林等の朽木下、落葉中で確認された。

#### 27. ハラブトギセル

大隅諸島に分布し、落葉層の中に生息している。林縁部や二次林にも多く、草むらの枯れた草の中にも生息している。森林の減少に伴って、生息地が減っている。

調査では、飛行場及び土砂採取区域改変区域内外樹林の樹幹等で多数の個体が確認された。

#### 28. ヤコビギセル

屋久島と種子島に分布する。本種は殻高 15mm、殻径 3.9mm 程度の小型の貝で、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息しており、生息にはある程度湿度の保たれた森林が必要である。

調査では、土砂採取区域周辺の朽木下で確認された。

#### 29. トカラコギセル

本州、四国、宮崎県、屋久島、三島村、奄美大島、沖永良部島に分布する。本種は樹上性で照葉樹林の樹幹に付着している。本種の生息には、ある程度湿度の保たれた森林が必要である。人目に付きやすく、人為的な採集によって数が減っている。

調査では、飛行場改変区域の樹林において確認された。

#### 30. ヤクシマダワラガイ

鹿児島県の大隅諸島に分布する。本種は照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴い減っている。

調査では、飛行場改変区域の樹林で 1 個体が確認された。

### 31. ミジンナタネガイ

本州、九州に分布し、山麓のやや湿った落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴って減っている。

調査では、飛行場改変区域の樹林において確認された。

### 32. カサキビ

本州、四国、九州に分布する。本種は殻高 3.5mm、殻径 2.8mm 程度の微小な貝で、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。

調査では、土砂採取区域周辺の樹林 1 箇所の朽木下で 1 個体が確認された。

### 33. ヒメカサキビ

本州、三宅島、八丈島、四国、九州、屋久島、黒島、口之島、中之島、悪石島、奄美大島に分布する。本種は照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴って減っている。

調査では、飛行場改変区域の樹林、土砂採取区域改変区域内外樹林の朽木や落葉中で確認された。

### 34. ヒメベッコウ

本州、四国、九州、五島（福江島）、屋久島、伊豆諸島に分布し、照葉樹林を中心とした林内の林床の落葉層に生息している。

調査では、飛行場及び土砂採取区域改変区域内外樹林の倒木下や落葉中で確認された。

### 35. ヤクシマヒメベッコウ

本州、四国、九州、屋久島に分布する。本種は照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴って減っている。

調査では、飛行場及び土砂採取区域改変区域内外樹林の倒木下や落葉中で多くの個体が確認された。

### 36. コシダカシタラガイ

本州、四国、九州、伊豆諸島、壱岐、屋久島、宝島に分布し、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。分布は広範囲だが、生息地が限られ、生息個体数は非常に少ない。

調査では、飛行場及び土砂採取区域改変区域内外樹林の倒木下や朽木下等で確認された。

### 37. ウメムラシタラガイ

本州、四国、九州、宇治群島向島、屋久島に分布し、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。比較的良好な林にしか生息しないため、森林の環境指標生物として重要である。

調査では、飛行場改変区域の樹林 1 箇所で 1 個体が確認された。

#### 38. オオクラヒメベッコウ

本州、四国、対馬、九州南部、大隅諸島に分布し、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴って減っている。

調査では、飛行場及び土砂採取区域改変区域内外樹林の倒木下や落葉下で確認された。

#### 39. タネガシマヒメベッコウ

九州、大隅諸島、奄美諸島、沖縄に分布し、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴って減っている。

調査では、飛行場改変区域内及び土砂採取区域改変区域内外樹林の倒木下や落葉中で確認された。

#### 40. コシダカヒメベッコウ

屋久島、種子島に分布する。本種は殻高 3.0mm、殻径 3.5mm 程度の微小な貝で、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息しており、生息にはある程度湿度の保たれた森林が必要である。

調査では、土砂採取区域改変区域内外樹林の落葉中や朽木下で確認された。

#### 41. ヤクシマシタラガイ

甌島、佐多岬、屋久島に分布し、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴って減っている。

調査では、飛行場改変区域内及び土砂採取区域改変区域外樹林の樹上で確認された。

#### 42. ソコスジカサキビ

薩摩地方、屋久島に分布し、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴って減っている。

調査では、飛行場改変区域の樹林で2個体が確認された。

#### 43. ヤクジマベッコウ

屋久島、口永良部島に分布し、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地が自然林に限られており、林の減少に伴い減っている。

調査では、飛行場及び土砂採取区域改変区域内外樹林の落葉中や朽木下で確認された。

#### 44. タカカサマイマイ

薩摩半島、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島に分布し、照葉樹林を中心とした林床の落葉層に生息している。生息地には比較的多いが、森林の減少に伴って生息地が減っている。

調査では、飛行場及び土砂採取区域改変区域内外樹林の樹幹や朽木下等で多くの個体が確認された。